

令和 6 年 5 月 2 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00272

研究課題名(和文) 平仮名古活字版の誕生と展開

研究課題名(英文) Research on the Establishment and Development of Hiragana Old Movable Type Printing

研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO, Dan)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30281554

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、江戸時代初頭に盛行した平仮名古活字版の誕生と展開を中心に、その特徴について究明した。まず、平仮名古活字版における字母使用が、概ね当時の右筆的存在の字母使用と一致する傾向にあることを確認した。また、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』に加え、嵯峨本『伊勢物語肖聞抄』、『源氏小鏡』で同一の活字セットを用いていることを確認した。そのうえで、15種類ある「事」という字の活字の使用状況を調査することで、各書の刊行順序を明らかにした。また、嵯峨本第三種本『徒然草』において、慶長15年版『日本書紀』の活字が混入していることから、両者が角倉素庵の工房での刊行書であることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前近代における平仮名書記は連綿体を用いることを主とした。平仮名古活字版は連綿体活字を多用することで自然な書記形態の再現に成功したが、今回の調査で字母の使用においても自然で、可読性の高い印刷をめざしていたことを明らかにできた。

また、嵯峨本は従来、本阿弥光悦の事業と見なされることが多かったが、近年ようやくそれが角倉素庵の事業であることが指摘されるようになった。本研究では嵯峨本と周辺書が一連の刊行物であることを明らかにしたほか、『徒然草』における慶長15年版『日本書紀』活字の混入の事実を指摘し、両者がともに素庵による刊行書であることを指摘した点でも意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated the characteristics of the Hiragana movable typefaces that were prevalent in the early Edo period. First, I confirmed that the usage of letters in the Hiragana movable typefaces tended to match that of the scribes at the time. Furthermore, I confirmed that the same set of movable typefaces was used in multiple works, including the "Hojoki." Then, by investigating the usage of specific typefaces, I revealed the publication order of each work. Additionally, in the Sagabon third edition of the "Tsurezuregusa," I pointed out that the movable typefaces from the Keicho 15th edition of the "Nihon Shoki" were mixed in, suggesting that both works were published in the workshop of Suminokura Soan.

研究分野：日本文学

キーワード：古活字版 角倉素庵

1. 研究開始当初の背景

古活字版の全体像は、早く、川瀬一馬氏『古活字版之研究』(安田文庫、1937年)によって明らかにされた。その後、この領域の研究は、作品ごとの版種の分類や新出本の発掘、各版の刊行背景の解明など、書誌学・出版史学の方面へと精緻化した(表章氏『鴻山文庫本の研究』わんや書店、1965年、ほか)。一方、印刷技法の根幹をなす組版の問題へも関心が注がれ、貴重な成果が積み重ねられてきた(渡辺守邦氏『古活字版伝説』青裳堂書店、1987年、ほか)。そして、近年の動向として注目されるのが、嵯峨本の研究の進捗である。そこでは、刊行全般に角倉素庵の果たした重要な役割が明らかにされ、版種の分類も川瀬氏以来の大きな見直しが行われた(『角倉一族とその時代』所収林進氏・森上修氏・高木浩明氏の論、思文閣出版、2015年、ほか)。また、嵯峨本『伊勢物語』の復元的な研究により、組版上の特性が論じられるようになったことも注目すべき点である(鈴木広光氏『日本語活字印刷史』名古屋大学出版会、2015年)。

このように進展してきた古活字版研究であるが、解明された部分には偏りがある。まず、すべての古活字版が刊記を有するわけではないので、無刊記版については刊行年・刊行者が不明のものが多く、研究を進めるうえでの手掛かりに乏しい。したがって、こうした刊本への本格的な研究は十分でない。古活字版の場合、刊記を有する本は国書よりも漢籍・医書・仏書の方が多く、国書の場合でも、『日本書紀』『職原抄』『太平記』『沙石集』など、漢文体・漢字片仮名交じり体の硬質な作品の方が多いいえる。逆に、平仮名活字で印刷された物語・草子の類には存外、刊記は付されていないのである。よって、これらの刊本は川瀬氏の『古活字版之研究』には著録されるものの、書誌学的研究も本文研究も十分に進展しているとはいえない。まさに平仮名本は古活字版研究中の空隙といってよく、そのため、刊年・刊行者未詳の状況と対峙しつつも、別のアプローチによる研究の開拓が待たれる状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は、従来、研究の対象とされることが乏しかった平仮名古活字版を対象に、その特性を明らかにし、印刷・出版史上の意義を考察することを目的とする。これまでの古活字版研究は版種の分類や刊行背景の解明が中心であった。これらは刊記や史資料により、刊年や刊行者が判明、または類推できるものを中心に進められてきた。また、活字の復原という方法から書物の刊行方法も解明されてきたが、考察対象となったものは嵯峨本『伊勢物語』のほか、例が少ない。こうした状況を踏まえ、本研究では刊行時期や背景も不明な多数の平仮名古活字版をとりあげ、平仮名古活字版がいかに誕生し、展開したのかに焦点をあて、書物としての特色を究明する。

3. 研究の方法

平仮名古活字版の誕生と展開に留意しながら、その特色を明らかにするため、本研究では「印面」に注目する。印面は、解明や論究の手掛かりに乏しい平仮名古活字版のなかで、唯一、研究上の素材となるといってよい。そもそも印面は文字によって形成される。考察の手掛かりとなるのは、行数、字詰めなどのレイアウト上の特徴や文字の書体、連綿のパターンといった点になる。平仮名古活字版の各本はこれらの要素をもとに、あるときは装飾性を強め、あるときは可読性を高め、またあるときは経済的合理性を追求することにより、自己の印面の特色を形成したと見られる。これらを広汎に調査することにより、平仮名古活字版の展開の軌跡を追う。

具体的には、平仮名古活字版が誕生する背景には、無数の写本が存在した。写本の書記形態が平仮名古活字本へどのように移入され、刊本として違和感なく読めるものとなったのか、考察する。

また、活字の同定作業から見えてくるものもあると思われる。古活字版の諸書においては、ときに同一の活字セットが使用されたことが十分想定されるが、その特定は困難である。本研究では特定の活字に注目することで、同定作業を合理的に進める試みを行う。その手法を通じて、諸書の刊行の先後関係、工房における印刷状況などを窺い知ることができるものと思われる。

4. 研究成果

(1) 平仮名古活字版と同時代の写本における変体仮名の字母の使用状況を調査した。嵯峨本『伊勢物語』では108種と飛び抜けて多く、以下、嵯峨本『徒然草』96種、嵯峨本『方丈記』95種、十行本『方丈記』94種、中院本『平家物語』(巻1)94種のごとくであり、漢字平仮名交じりの慶長14年刊『太平記』(巻1)では81種であった。一方、複数名による寄合書である幸隆本『徒然草』では76~98種という状況である。同本には、高位の人物の書には字母の種類が少なく(中院通勝82種、細川幸隆77種)、右筆的な筆跡をもつ人物の書には字母の種類が多い(竹原市蔵94種)という傾向が見られる。これらの数値を踏まえると、嵯峨本『伊勢物語』は当時の右筆的人物よりも多い種類の仮名字母を使用し、装飾的印面を形成していること、他の嵯峨本や中院本『平家物語』など一般的な平仮名古活字本は右筆的人物が使用する仮名字母数とほぼ同じであること、慶長14年刊『太平記』のごとき漢字平仮名交本では、仮名字母数は少ないことがわかる。純粋な平仮名古活字版においては、書の専門家と同等の水準の印面を形成することが

めざされていたものと考えられる。

(2) これまでの研究において、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』に共通の活字が使用されていることは解明されたが(小秋元段「嵯峨本とその前史の一相貌」『法政大学文学部紀要』82、2021年3月)、今回さらに嵯峨本『伊勢物語肖聞抄』、『源氏小鏡』でも同活字が用いられていることを確認した。すなわち、嵯峨本と呼ばれる諸本において、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』、嵯峨本『伊勢物語肖聞抄』、嵯峨本『源氏小鏡』が、最も多くの書籍間で活字を共有し、嵯峨本の「中心」をなしていたのである。

そして、これら諸書のうち、15種類存在する「事」という活字の使用履歴をたどることで、その刊行順序が、十行本『方丈記』 嵯峨本第一種本『徒然草』 嵯峨本国会本『徒然草』 下村本『平家物語』 嵯峨本第四種本『徒然草』 嵯峨本第三種本『徒然草』 嵯峨本『伊勢物語肖聞抄』 嵯峨本『源氏小鏡』 嵯峨本第六種本『徒然草』であることを解明した。

また、これら一連の刊本のなかでも、その初期段階に位置する嵯峨本第一種本『徒然草』と十行本『方丈記』が、活字を共有しつつも、そのなかにはどちらか一方でしか用いられない活字を含むこと、さらには、その影響が国会本『徒然草』上冊の組版・印刷時まで存在することを発見した。その影響とは、国会本『徒然草』上冊の組版・印刷時、第一種本『徒然草』に使用された活字のグループと十行本『方丈記』に使用された活字のグループの運用が分けられていたということである。このことは、活字群の管理はグループ単位でなされていたこと、個々のグループには刊行に携わった人々の所有意識が存在し、活字ごとに所有者の標識があったことなどを推測させる。

(3) 嵯峨本第三種本『徒然草』の上冊、第三百五十五段には楷書体の「課」字の活字が使用されている。この活字は慶長15年刊の『日本書紀』に使われていることが特定できた。慶長15年版『日本書紀』の刊行者は、刊記より「野子三白」と称する人物であることが知られている。この人物の伝は未詳だが、近藤喜博氏が慶長十五年版『日本書紀』のうち、大東急記念文庫に所蔵される松尾大社の撰社、月読神社の禰宜家である秦氏(松室家)の旧蔵本に、当該書が角倉素庵の刊行書であること、角倉家と松室家とが素庵以来、相婿の姻戚関係にあったことなどが、松室種盛によって書き入れられていることを紹介している(「角倉素庵と日本書紀」『國學院雑誌』1955年5・6月号)。今回の発見は、素庵を慶長15年版『日本書紀』の刊行者とするこの伝承の正しさを裏付けるものとなった。そして、嵯峨本の工房と『日本書紀』の工房が地続きで、しかも素庵によって統括された空間であったことも示すものとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小秋元 段	4. 巻 883
2. 論文標題 〔書評と紹介〕高木浩明著『中近世移行期の文化と古活字版』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 98-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小秋元 段	4. 巻 747・748
2. 論文標題 嵯峨本とは何か	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国立国会図書館月報	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/12894638	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小秋元 段
2. 発表標題 活字から見た嵯峨本 研究に向けた3つの視点
3. 学会等名 総合書物学2022年度第1回共同研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 樺山紘一、小秋元段、入口敦志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 印刷博物館	5. 総ページ数 57
3. 書名 印刷博物館講演録「印刷博物館20周年記念トークイベント 第1回印刷文化会議 テキストと版画 印刷による知の循環」	

1. 著者名 藤本幸夫編、小秋元段ほか分担執筆	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉成出版	5. 総ページ数 877
3. 書名 書物・印刷・本屋：日中韓をめぐる本の文化史	

1. 著者名 佐々木 孝浩、佐藤 道生、高田 信敬、中川 博夫編、小秋元段ほか分担執筆	4. 発行年 2024年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 932
3. 書名 古典文学研究の対象と方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>国立国会図書館職員研修会において講演「日本出版史上における古活字版の意義」（2022年8月17日）</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関